

OSAKA UNIVERSITY OF ARTS

絵画実習 II

足立 真三

高田 光治

藤原 勝彦

守谷 史男

矢野 正治

植田陸雄（美術家） 「風」のきまぐれ

2000年5月4日インタビュー 阿倍野・ホテルロビー

●話題手 ▼聞き手

▼ 植田さんは作品を発表し始めたときは平面でしたね。それも支持体がキャンバスでなくアルミ板であり、コンプレッサーの吹き付けというように特殊な素材と技法で作品を制作しておりましたね。

● アルミに描き始めたのは1984年頃からです。アルミ板はキャンバスに比べてクールであり、それでいて温かい、そういうアルミの質感が好きで、表面処理をしていない生地のままのアルミを使いました。

▼ 制作にあたって何かモチーフまたはイメージなどはありましたか。

● 空や雲やその辺の草や土、それから機材でも何でも、自分のまわりのものが最初

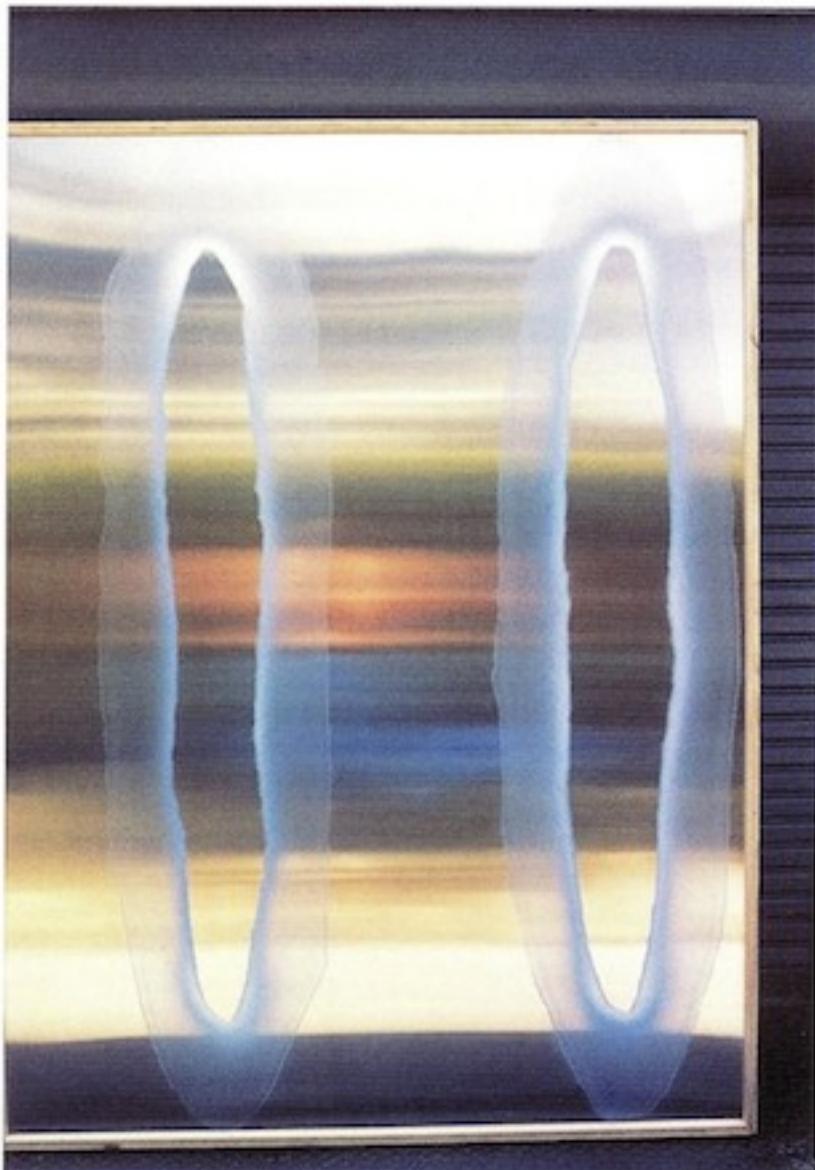
に引っかかります。そこからエスキースが始まりますが、最初に引っかかったものが一番大切なことです。それをどんどん変形させていきます。それで最終的には一番最初に戻ります。今までずっとそうでした。いろいろやって、結局最初に描いたものが一番よいように思います。

▼ アルミ板という特殊な支持体を使うことに関して、少し説明してください。半鏡面のアルミ板ですから、絵具の入っていない部分はまわりの風景なり人物なりが映り込むわけですが、周囲の環境も取り込んで作品にするわけですね。

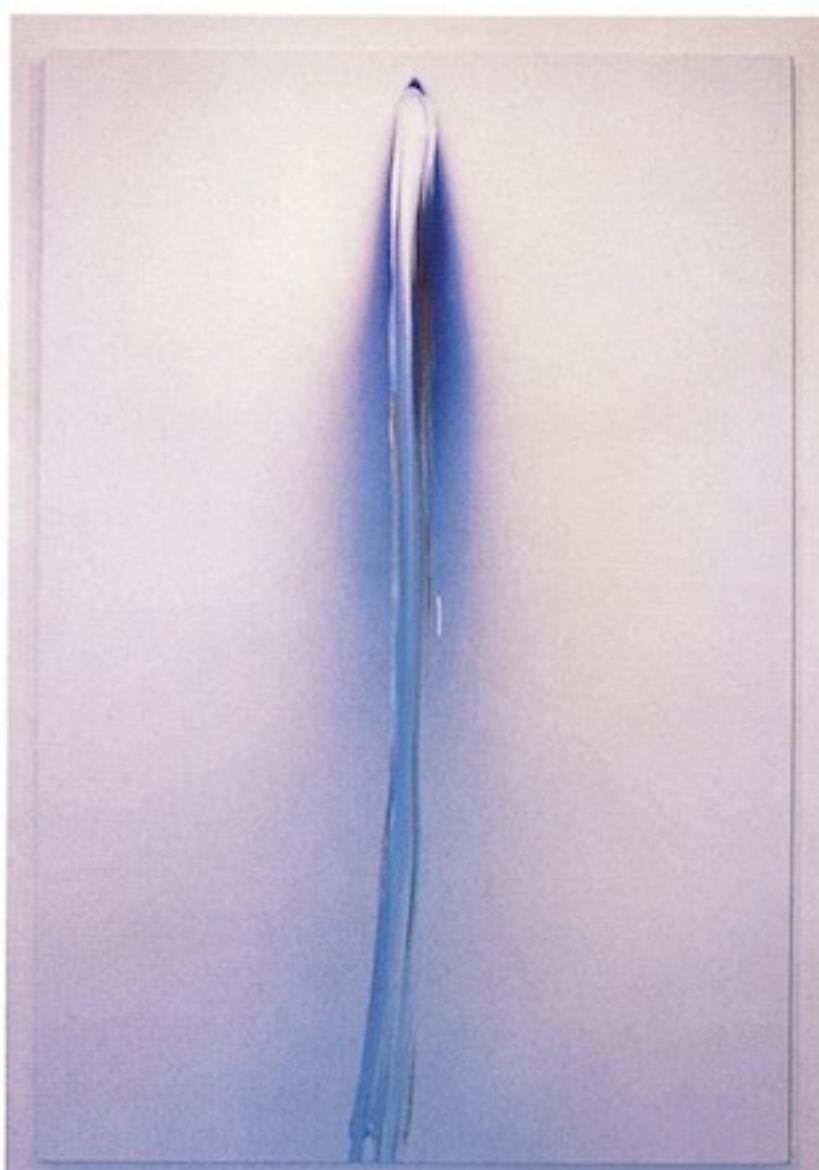
● 本当は描いているものより、そのまわ



1950年 大阪に生まれる
現在 松原市在住

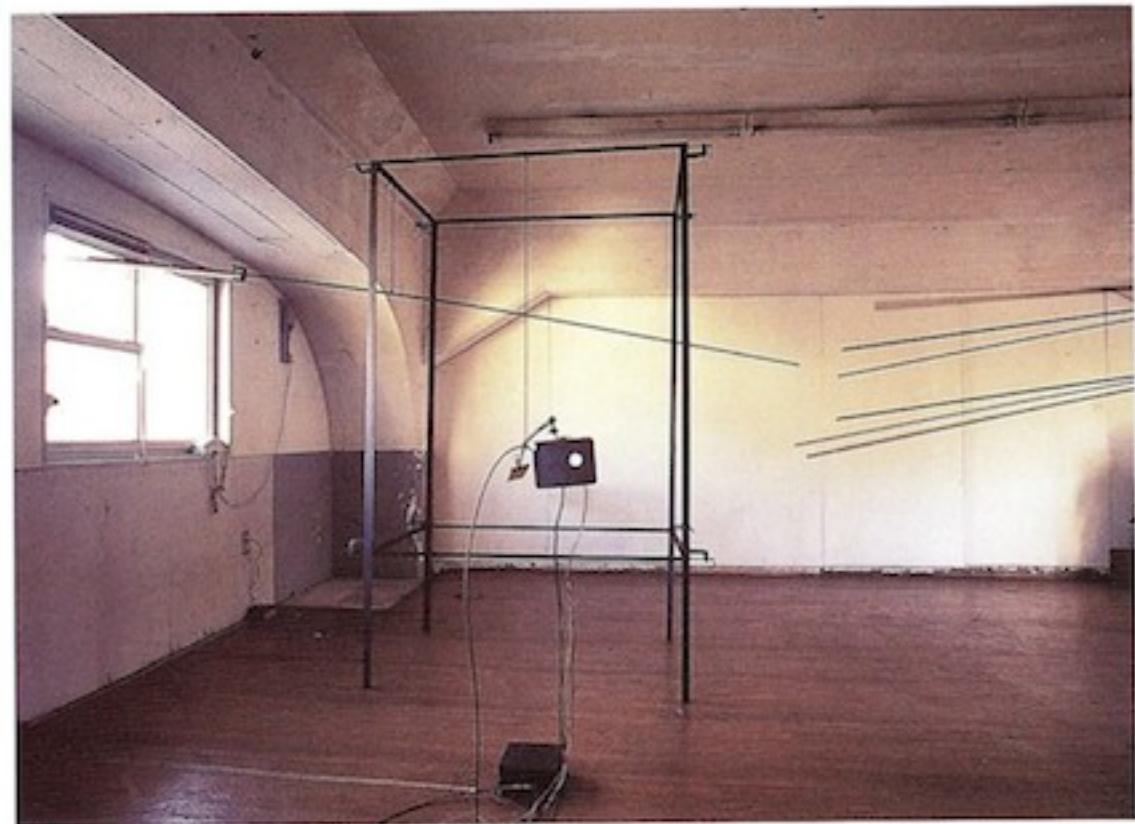


▲作品 1990



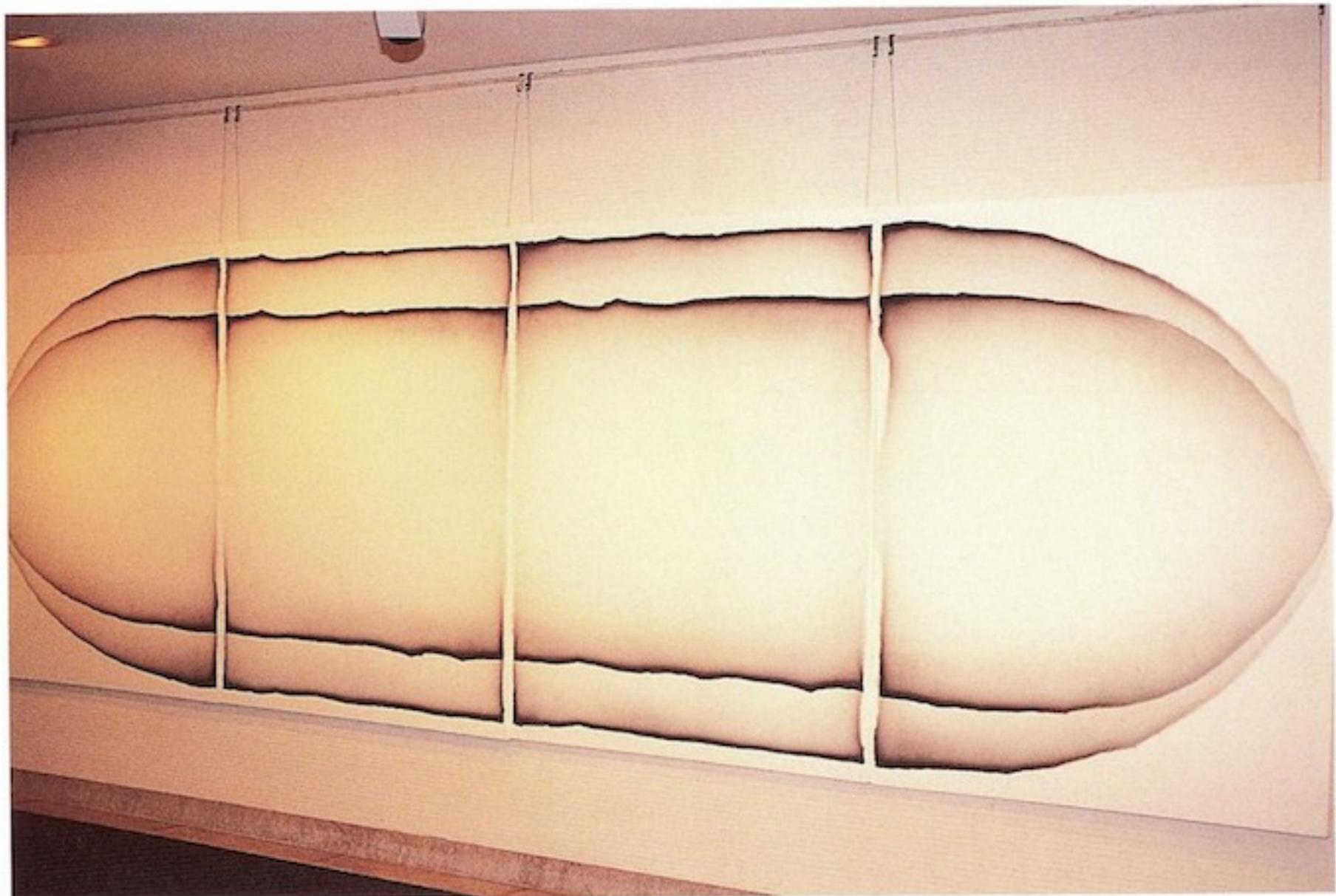
▲作品 1991

りのアルミの地肌が大切なのです。だから最小限のものしか描かない。デッサンをして一応の形が決まると9割以上は終わっているのです。作業の仕方は段ボールを切り、形に沿って断面を当てて色を



▲個展（ビデオ） 1995

吹き着けます。この場合、じかにアルミ板に塗料を吹き着けるのではなく、平面の上にマスキング用に立てた段ボールにエアーを直接吹き着け、そのはね返りのエアーによって平面に色を定着させます。このときの吹き着けの力加減が微妙です。そのときはものすごく緊張します。経験で吹き加減をコントロールすることがありますが、ほとんど「神頼み」という感じです。ビラビラした自然な線も、適当にくしゃくしゃと曲げた段ボールで作ります。色を吹き着けると、段ボールの切れ目の細かい凹凸から絵具が流れて輪郭がぼけたりします。それで、素材のアルミと絵具の境界が曖昧になります。グラデーションにしても勝手に流れた濃淡なのです。作品を写真に撮ったりしていると、周囲が映り込みます。見た人は映り込みも描いていると思ってしまうようですが、まわりを取り込んでいる部分も作品に含めているので、それは別にかまわ



▲作品 1991

ないと思っています。逆にまわりの映り込んだ部分も描くとおもしろいかなと思つたりしましたが、やはり何も描かなく、場所場所で違った環境が映り込む方がおもしろいので、その方法を取ってきました。

▼ 支持体とアクリル絵具の相性はどうですか。

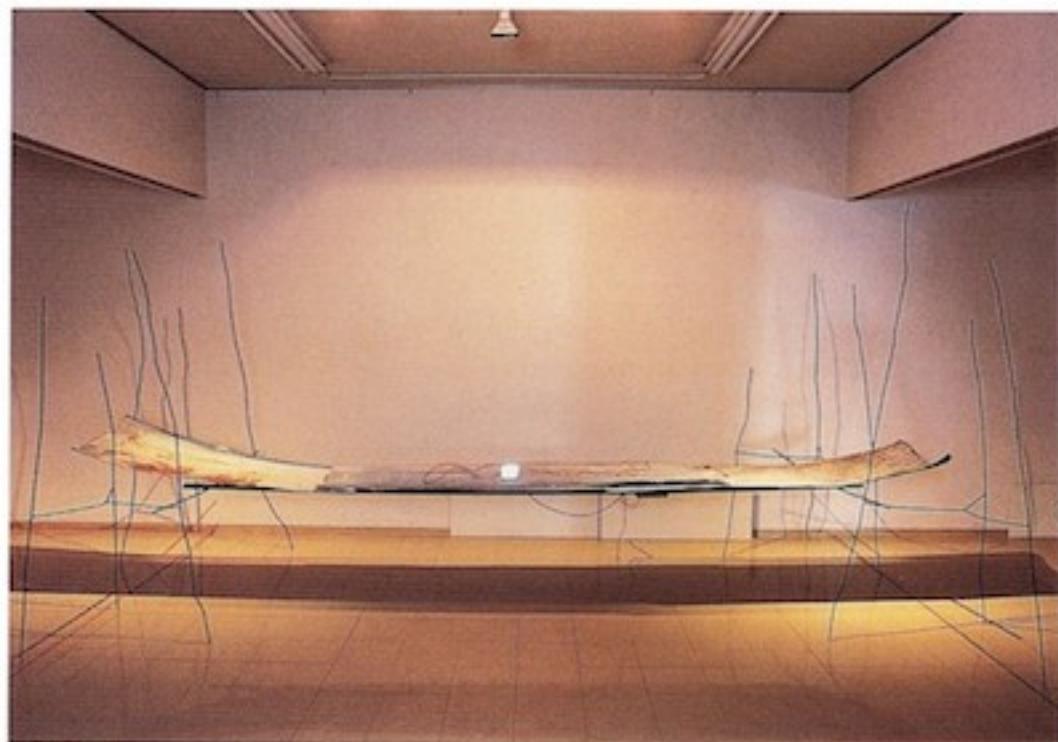
● アルミ板は加工されているから、アクリル絵具がのりにくいし、スプレーで空気中に飛ぶと固着力が弱くなります。最初の頃は空気の流れと重力だけを使って描こうとしたから、だいぶノズルと画面を離してやっていました。離すと絵具が粉になって落ちてしまい、着きが大変悪い状態になるのです。それで、もっと近づけて当たるぐらいにして吹くようにしました。それでも固着力が弱いので、コーティングで工夫をしています。アルミが本当に自分に合っているかは、わからないですね。描くのはほんの一瞬だから、失敗したらそれで終わりという緊張感から解放されたいという気持ちが出てきました。立体は解放されます。立体をつくるときは、大変楽しいですね。

▼ それで立体のほうに移っていましたですね。

● 立体は解放感があります。立体をつくるときの方が楽しいのは、その反動かもしれない。共通する部分はやはり「気持ちいい感じ」です。絵を始めたのが30歳くらいからで、どんどん回り道をしているから、今だに半分何やっているのかわからない。現実から逃げて自由になりたい気持ちがあった。しかし、自由はつかみどころがないから不安で、また安定を求める葛藤が常時あります。ものすごく気持ちいい反面、足がいつも地面についている浮いていないという不安、しかし今はそのことを楽しんでやっています。

▼ 現在の風のドローイングを制作し始めたのはいつごろからですか。

● デンマークに行ったのは1997年の夏ですから、その頃からですね。それまでに



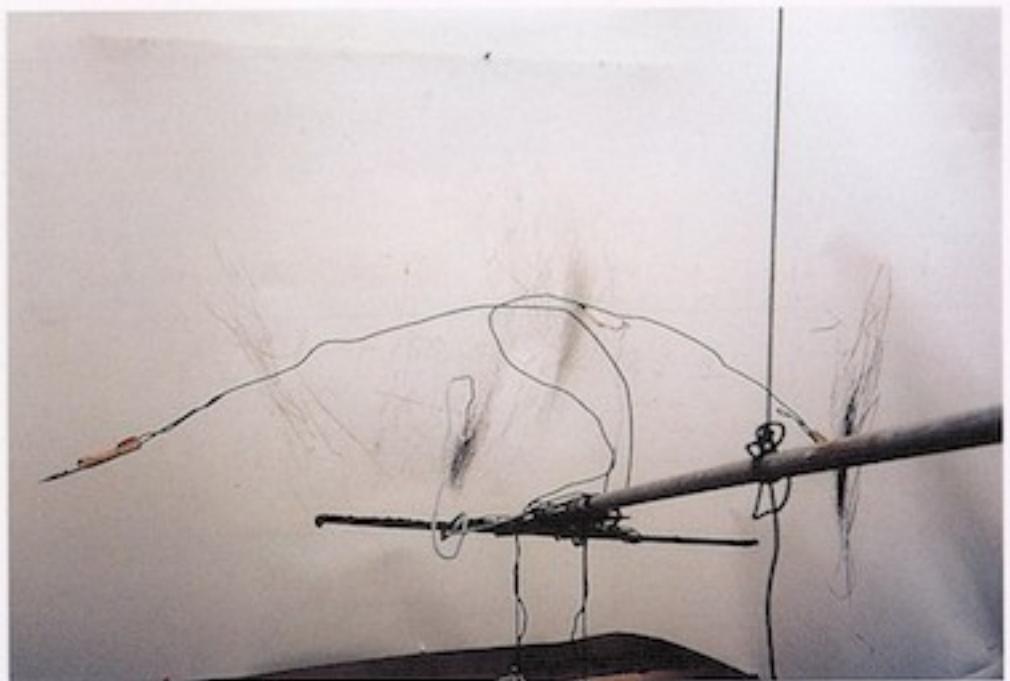
▲個展（ビデオ） 1995



▲デンマーク・プランテ 鉄道員の小屋 1997



▲アトリエの生垣 1997

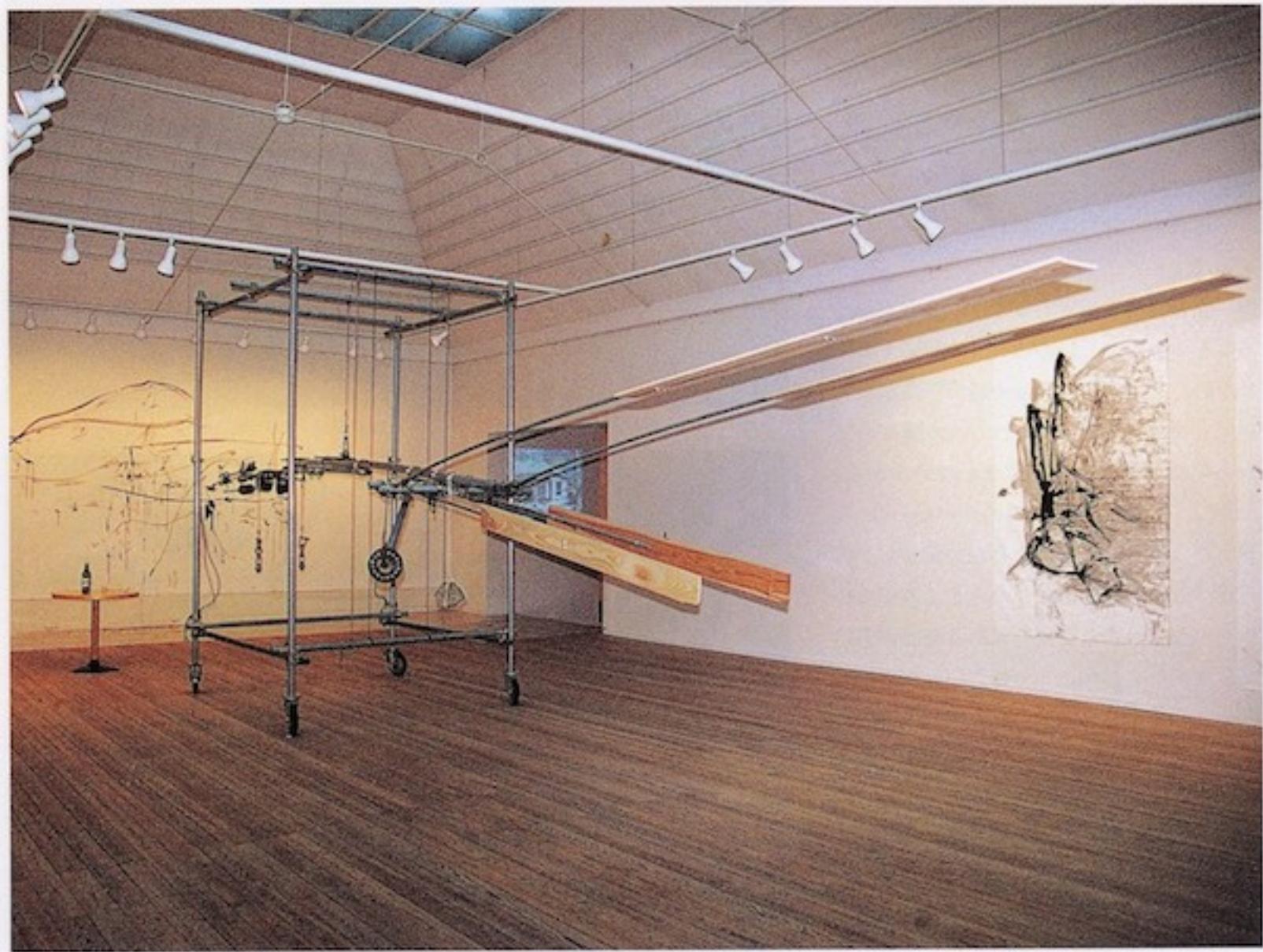


▲スタジオ 1997

も立体では音や映像を出したり、メカニックな部分も結構好きでしたから、その部類の作品を作っていました。

▼ デンマークでの制作について話してください。

● デンマークにはワークショップ（公開制作）に参加するために行きました。アトリエには公開制作の場として操車場が使われ、見上げるほどの扉が円弧を描いて並び、左右に押し開くとレース越しのような北欧の日差しが入り込みました。以前から気になっていた鉄道員の小屋を使って作品をつくり始めたのは、ワークショップも半ばになった頃でした。小屋の周りで集めたパイプ、板、鉄道用の資材を使い、15mほどの翼をつくりあげ、これを窓際にロープでつるしました。数個の石でバランスをとると、



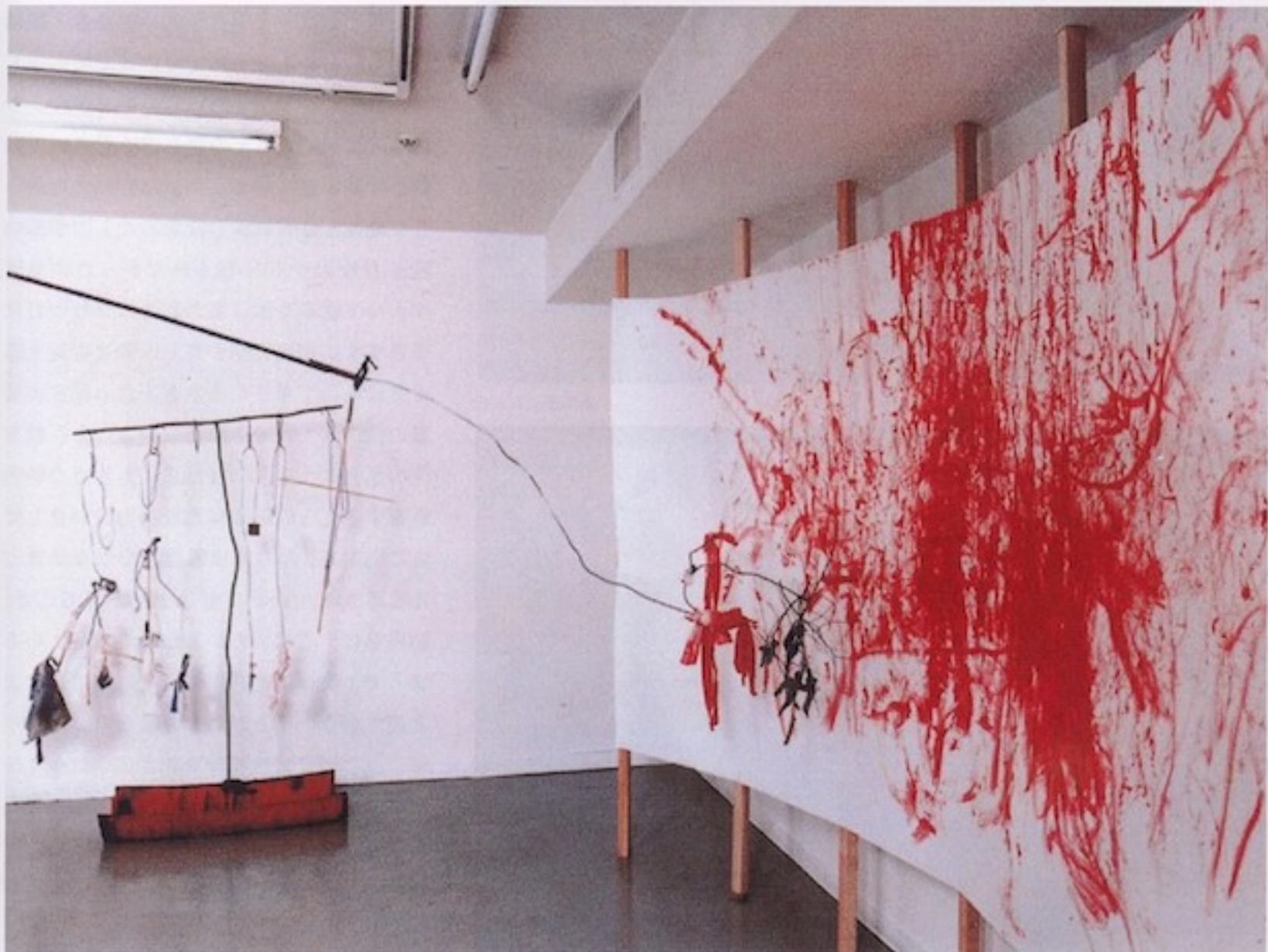
▲個展 1998

針金を使って木炭と鉛筆を取り付け、風によるドローイングが始まりました。翼は7月のブランデの風を受けて力強く動き始めました。デンマークは、ヘブンズヒルと呼ばれる一番高いところで標高100m、一年中強い風が吹きます。特に冬はユトランド半島の東海岸に位置するオウフォスの浜風は、意外なほどさらさらして驚かされます。ときおり村人が近づいては室内をのぞきこんでいき、私とほかのアーチストもそれが日課となりました。一年後にどのようなものが出来上がるか楽しみだったのですが、数カ月後、鉄道員によって撤去されてしまいました。

デンマークに行く前に制作した作品の個展は、神戸のJRの高架下の画廊で行いました。空間の下見にいくと、窓ガラスが一



▲作品 1998



▲個展 1998



▲芦屋 1998



▲芦屋 1998



▲アトリエ 1999

枚割れたままになっていて、そこから下をのぞくと風景が輝いてみえました。窓から鉄筋と板でつくった羽根をつき出し、反対側の大きな窓は全開、6本の羽根を出し、破れた窓から室内に入り込んだ鉄筋の先には、5cmほどのブラウン管を取り付けビデオを使い24時間満月が映し出されるようにしました。

私の作品はつくるというよりも見つける行為だと思います。すべてはすでに準備されていると思います。ですから、最小限の手しか入れないようにつとめています。風のドローイングをやるようになってからは、出来上がったドローイングを選んだりトリミングしたりしていましたが、最近は風が描いている事実とその行為を楽しんでいる人間がいるということで十分なように思えてきました。

▼ 風のドローイングを始めてから、現場にあるいろいろなものをその現場で利用して作品をつくっていらっしゃいますが、その時に感じたことを話してください。

● 身勝手なもので、以前は作品の材料となる廃品しか目に入らなかったし、季節の変り目なんかも目もくれなかったのですが、今では草や木、風の動きばかりが目にきます。初夏の緑が輝く一瞬まで見えるようになってきました。露を含み朝夕には枝の位置が大きく上下していること、枝を一つ動かすと周りの枝は思いもかけない動きをすること、苔が猛烈な勢力争いをしてること、1本の木には想像もつかないほどたくさんの生命が寄り集まること、結局私は、日常いろいろな物事を見ているようで、実は関心のあること以外はほとんど見ていないことがわかりました。

▼ 風という自然現象を相手にドローイングをしてもらうわけですが、それはほとんどすべてを偶然にまかせての作業ですね。

● 作品をつくり始めた当初、一番関心があったのは時間と空間、境界でした。そこでは、ダイナミックな変化と関係性が表出

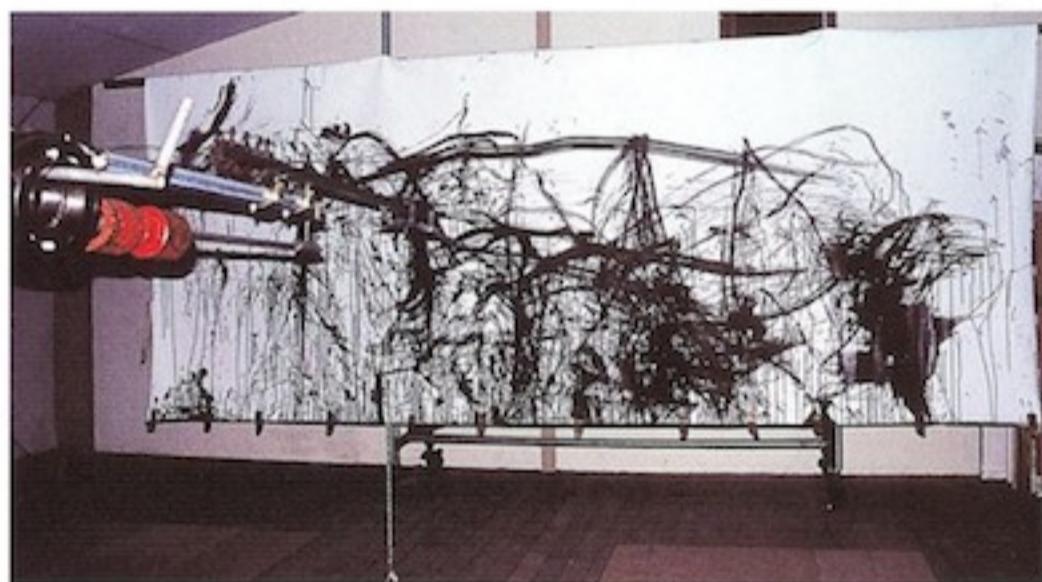
します。境界は明快なようで実はあいまいに思えます。平面、立体にかかわらず作品をつくるときは、1本の木を意識していました。全体は木の幹や枝ぶりのようにダイナミックに、ディテールは微風で揺れる葉のように繊細に表現することを心がけていました。それぞれの枝はその周りを異化し、空間をつくり出します。空間を出現させるための1本の線、自然はいとも簡単にそれをやってのけます。

▼ 風にもいろいろな場所でいろいろな吹き方がありますね。いわば風のドローイングとは空気の流れの痕跡でもあるわけですが、植田さんの場合、痕跡として印されたドローイングとともに、それを生み出す装置の方にも大きな比重がかかっているように思えます。

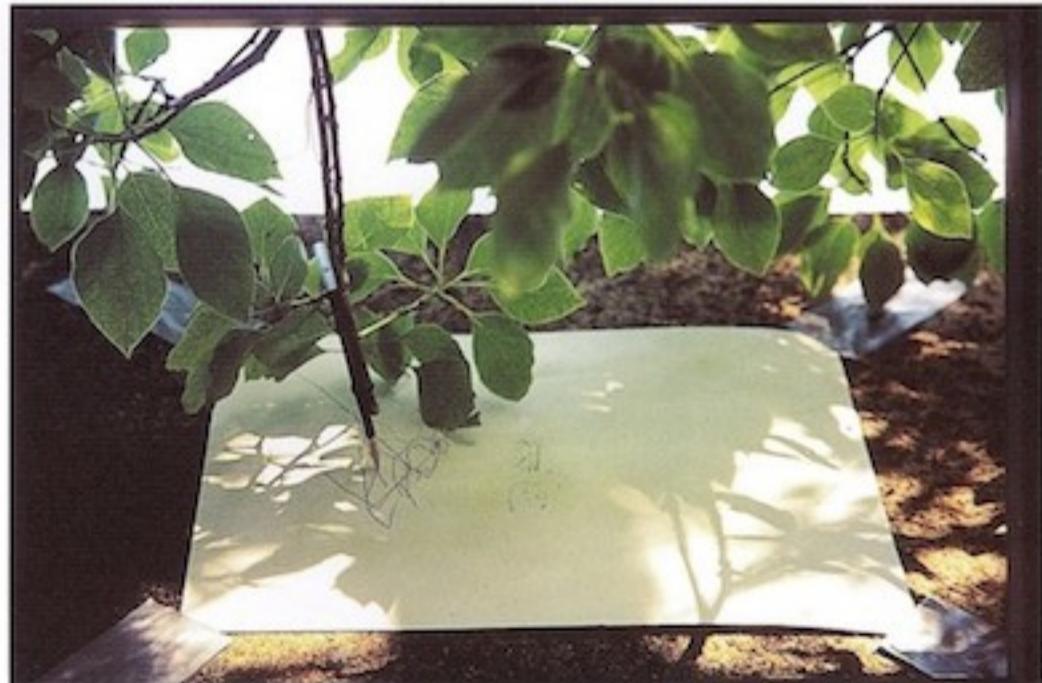
● 風がドローイングしているところをみると、飽きないものがあります。描いている瞬間は自分で描いているような錯覚さえ覚えます。真っ白い紙を前に何度も何度もペン先がためらいを見せ、ふと、吐息のような風が吹くと意を決したように1本の線を引く、次に引く線がわからず長い間滞ったり、同じ場所をいくどもいくども押しつづけたりします。以前に九階のビルの屋上で春一番の風をとらえようと大きな装置を設置したことがあります。ビルに沿って吹き上げてくる複雑な風は、力強い上下の線となりました。いつもやっている木の枝に付けたペンは上下左右のみならず前後にも動き、複雑な線を生み出します。また風だけではなく、気候の変化も敏感に感じとります。虫がとまることもあり、それにもまして枝自体が成長しているのです。雨が降れば山水画のようにインクが流れることもあります。私はどちらかといえば消えてしまいそうな数本の線が好きなのです。風を紙上に伝えるための装置ですが、すごく大仰な装置をつくることもあります。大きな



▲作品 1999



▲スタジオ 1999



▲尼崎 1999

装置をつくる場合は、材料は現地で調達します。このときは装置自体を造形物として意識します。風で動く立体造形を制作している気分になります。

▼ これからの展望はどうですか。

● 私は22歳のときに放浪の旅に出ました。ヨーロッパまでの片道切符をもち、西ヨーロッパ、東ヨーロッパ、北アフリカ、中近東、アジアと3年間ヒッチハイクで回りました。肩まで髪の毛を伸ばし、目的も地図もない生活でした。風のドローイングを始めてから、その頃に少し戻った気がします。今は風のコレクターとなって世界中

を旅したいと願っています。アフリカ、南米、チベット、モンゴルの草原、タクラマカン砂漠、エアーズロック、グリーンランド、カイラス山、スコットランドの森、ニューヨークのビルの谷間、新世界のガード下……。

作家や詩人をたずね、風をあつめるのも楽しそうです。

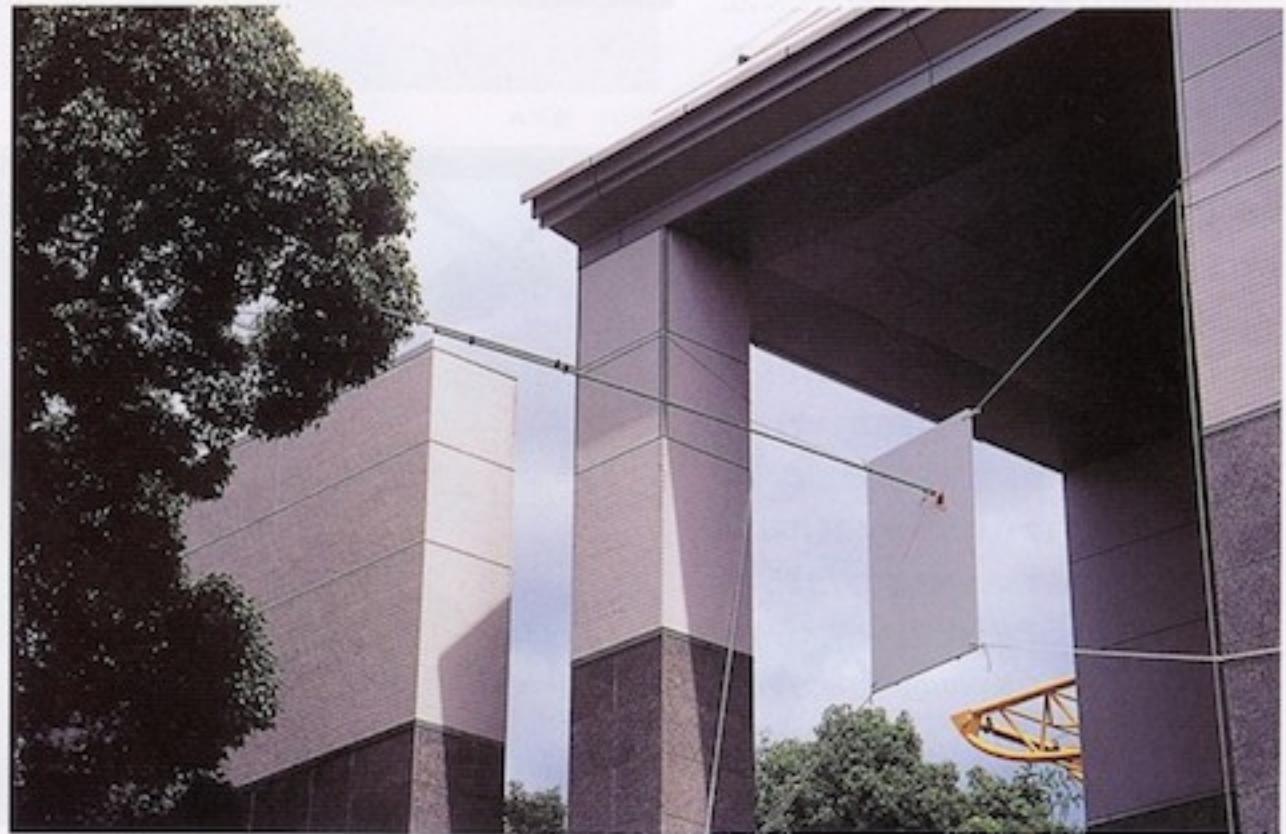
今は身軽いものです。数本のペンと鉛筆、小さなカルトン、これだけでどこへでも出かけて制作できます。以前は大層な装置に凝ったりしましたが、今は風を友に気軽な気分でやっています。



▲端光寺 1999



▲平野 1999



▲ 広島市現代美術館 2000